

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第20-1集

陶邑・伏尾遺跡III

A 地区

近畿自動車道松原・すさみ線建設に伴う発掘調査報告書

1997

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府文化財調査研究センター

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第20-1集

すえ むら ふせ お
陶邑・伏尾遺跡III

A 地区

近畿自動車道松原・すさみ線建設に伴う発掘調査報告書

1997

大阪府教育委員会

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

序 文

大阪府堺市の東南部に広がる丘陵地帯は我が国における須恵器生産の一大拠点としてよく知られている地域です。平成6年9月に開港した関西国際空港の主要アクセスである近畿自動車道路がこの一角を縦断することになってから、本府といたしてまでも地域内の埋蔵文化財の取り扱いについて各関係機関と協議を重ね、万全の努力を払ってまいりました。本路線に関わる埋蔵文化財の調査は、現在の刺大阪府文化財調査研究センターに統合される前の刺大阪文化財センターと刺大阪府埋蔵文化財協会に委託してきましたが、両法人から刊行された調査報告書はすでに20冊を越えています。

ここに報告します伏尾遺跡は、昭和62年に調査が始まって以来、初期須恵器製作集団の集落の構造が明確に把握できる遺跡として広く内外の関心を集めてきました。調査報告書はすでに集落や古墳を中心とした成果をまとめた2冊が刊行されており、本書はその最後の巻となります。

長期間にわたる調査をお願いした刺大阪府文化財調査研究センターの関係者のご尽力をはじめ、多大なご協力をいただいた日本道路公団ならびに地元堺市の関係各位に深く感謝いたします。

今後とも、本府の文化財行政に対して、引き続きご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 田中 宏

序 文

大阪府堺市域には、巨大古墳が連なる百舌島古墳群、我が国の須恵器生産の拠点となった陶邑が築かれており、古墳時代には歴史的に重要な位置を占めていた地域です。

堺市の南東部に所在する伏尾遺跡は、この陶邑の一角に位置します。調査は関西国際空港のアクセス道路である近畿自動車道の建設に伴い、昭和62年度から平成3年度まで行われ、弥生時代から中世に至る多くの遺構や遺物が発見されました。

このうち特に古墳時代中期の集落の調査成果は陶邑を考える上で重要な資料となりました。遺物からは当集落が須恵器生産に関与した集団によって営まれ、生産が本格化した時期に大きく発展したことが明らかとなり、さらに遺構群の状況からは居住域、倉庫域、墓域の関係も把握され、生産集団の集落の構造も明らかにすることができました。

このような伏尾遺跡の調査成果からは、窯跡や遺物からだけでなく集落からも陶邑を検討することが可能となり、陶邑の成立過程や構造などの諸問題が解明されることが期待されています。本書は伏尾遺跡の調査報告書の3冊目にあたり、倉庫群や古墳群の成果を中心に報告しています。本書がこれら問題解明の一助になれば幸いです。

現地調査および報告書刊行に当たっては、日本道路公団大阪建設局、堺市教育委員会、地元各位をはじめ関係各位には多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも、当センターの事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成9年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井 清足

例 言

1. 本書は近畿自動車道松原・すさみ線建設工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査のうち、堺市伏尾・平井に所在する伏尾遺跡の発掘調査報告書の「Ⅲ」である。
2. 本調査は日本道路公団の依頼を受け大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施し、報告書の作成は財団法人大阪府文化財調査研究センターに引き継いで実施した。
3. 現地調査は1991年1月～3月と1991年4月～7月に行い、前者を岸本道昭、後者を岡戸哲紀が担当した。
4. 報告書作成作業は1996年度に行い、岡戸が担当した。
5. 調査の実施に当たっては、日本道路公団大阪工事事務所・岸和田工事事務所、堺市教育委員会、地元各位など格別の協力を得た。
6. 本書の写真は遺構について各調査担当者、遺物を立花正治が行った。
7. 本書の執筆・編集は岡戸が行った。
8. 出土遺物、写真、遺構図、遺物図などの各資料は一括して当センター南部調査事務所に保管・管理されており、広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 本調査および本書では、第1章第2節で述べるような国土座標（第VI系）による地区割り設定がなされているが、平面図では方位が座標北を示し、図中にはXとY座標軸がm単位で標記される。
2. 標高は、東京標準潮位T. P. で統一している。
3. 遺構番号は各調査区で付し、遺構の性格を示す記号は財団法人大阪府埋蔵文化財協会「発掘調査規程」に準じて第1章第2節で述べるような表現をしている。なお、本報告では遺構毎に番号を付し、調査時の番号・種類の記号を併記した。
4. 本書で使用した土壌色は小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』を使用して命名した。
5. 遺構平面図のうち掘立柱建物は原則的に1/60で表示したが、その他は適当な縮尺を採用した。
6. 遺物は出土地・種類を問わず通し番号を付し、実測図と写真図版に共通する。遺物の縮尺については基本的に1/4で統一した。土器の実測図の断面は種類に関係なくすべて黒塗りとした。
7. 焼き歪みのみられる土器は、基本的に復元実測を行った。
8. 本文中に「古墳時代中期」、「5世紀後半」などの言葉を使用するが、本書の主要な遺構の時期は、いわゆる「初期須恵器」の時期にあたり、周知のように須恵器生産開始実年代についても考古学では5世紀初頭から5世紀中頃という説があり、約半世紀の開きがある。報告では厳密な立場を示すには至っていないため、以上を念頭にして不統一や学説との距離をお許しいただきたい。
8. 本書の中で、研究の現状から勘案して不適当な表現がみられた場合は、すべて報告者の責に帰すが、他意のあるものではない点ご容赦願いたい。

本文目次

序 文	
例 言	
凡 例	
第I章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	4
第II章 遺跡の環境	6
第1節 遺跡の位置	6
第2節 地理的環境	6
第3節 考古学的環境	7
第III章 遺跡の概要	10
第1節 既往の調査(1988・1989年度の調査)	10
第2節 周辺域の調査	12
第IV章 集落部の調査	13
第1節 概要	13
第2節 検出された遺構と遺物	14
第1項 掘立柱建物	14
第2項 土坑	32
第3項 包含層の遺物	42
第4項 丘陵斜面部の調査	51
第5項 谷部の調査	55

第V章 古墳群の調査	62
第1節 調査区の概要	62
第2節 古墳の概要	65
1. 5号墳 (251-OG)	65
2. 6号墳 (252-OG)	73
第VI章 遺構・遺物の検討	74
第1節 遺物の検討	74
第2節 古墳時代中期における伏尾集落の位置づけ	79
第VII章 結語	89

挿図目次

第1図 大阪府位置図	1
第2図 伏尾遺跡の位置	2
第3図 調査区位置図	3
第4図 調査地区割り模式図	5
第5図 周辺の遺跡	8
第6図 集落部の遺構概略図 (1988・1990年度調査区)	15~16
第7図 1990年度の調査で検出された遺構群	17
第8図 建物1 (5-OB) 平・断面図	18
第9図 建物2 (15-OB) 平・断面図	19
第10図 建物3 (11-OB) 平・断面図	20
第11図 建物4 (103-OB) 平・断面図	21
第12図 建物5 (19-OB) 平・断面図	22
第13図 建物6 (27-OB) 平・断面図	23
第14図 建物7 (70-OB) 平・断面図	24
第15図 建物8 (78-OB) 平・断面図	25
第16図 建物9 (53-OB) 平・断面図	26

第17図	建物10 (47-O B) 平・断面図	27
第18図	建物11 (36-O B) 平・断面図	28
第19図	建物12 (40-O B) 平・断面図	29
第20図	建物13・14 (62・66-O B) 平・断面図	30
第21図	土坑1 (1-O O) 出土遺物 1	33
第22図	土坑1 (1-O O) 出土遺物 2	35
第23図	土坑1 (1-O O) 出土遺物 3	36
第24図	土坑1 (1-O O) 出土遺物 4	39
第25図	土坑1 (1-O O) 出土遺物 5	40
第26図	土坑2 (2-O O) 出土遺物	41
第27図	包含層出土遺物 1 (建物 5・6 上面)	43
第28図	包含層出土遺物 2 (土坑 1, 建物 1・2 上面)	44
第29図	包含層出土遺物 3 (土坑 2 上面)	46
第30図	包含層出土遺物 4 (土坑 2 上面)	47
第31図	包含層出土遺物 5 (土坑 2 周辺)	49
第32図	包含層出土遺物 6 (土坑 2 周辺)	50
第33図	丘陵斜面部出土遺物 1	52
第34図	丘陵斜面部出土遺物 2	53
第35図	丘陵斜面部出土遺物 3	54
第36図	谷部地層断面図	56
第37図	谷部出土遺物 1 (第Ⅱ層)	57
第38図	谷部出土遺物 2 (第Ⅲ層)	59
第39図	谷部出土遺物 3 (第Ⅲ層)	60
第40図	古墳群全体図 (1988・1991年度調査区)	63~64
第41図	5号墳 (251-O G) 平・断面図	67~68
第42図	5・6号墳 (251・252-O G) 出土遺物	69
第43図	5号墳 (251-O G) 出土埴輪 1	71
第44図	5号墳 (251-O G) 出土埴輪 2	72
第45図	伏尾遺跡の概略図	80
第46図	伏尾集落 (古墳時代中期) の概略図	81

図版目次

図版1 遺跡の遠景

上段 遺跡の上空より百舌島野を望む 下段 遺跡上空より泉北丘陵を望む

図版2 平地部の遺構(1990年度調査区)

空中垂直写真

図版3 平地部の遺構(1990年度調査区)

上段 全景(北から) 下段 全景(東から)

図版4 平地部の遺構(1990年度調査区)

上段 土坑1・2と建物8~12(北から) 下段 建物5~7(南から)

図版5 平地部の遺構(1990年度調査区)

上段 建物1~3(南から) 下段 建物13・14(東から)

図版6 平地部の遺構(1990年度調査区)

上段 土坑1全景(南から) 下段 土坑1遺物出土状況(南から)

図版7 平地部の遺構(1991年度調査区)

上段 全景 下段 谷部土層断面

図版8 平地部の遺構(1991年度調査区)

上段 全景(北から) 下段 溝群(北西から)

図版9 古墳群(1991年度調査区)

上段 全景(南から) 下段 6号墳全景(北東から)

図版10 古墳群(1991年度調査区)

上段 5号墳全景(北から) 下段 5号墳東辺周溝断面

図版11 古墳群(1991年度調査区)

上段 5号墳南辺周溝内遺物出土状況(東から)

下段 5号墳東辺周溝内遺物出土状況(北東から)

図版12 出土遺物(1990年度調査区)

土坑1

図版13 出土遺物(1990年度調査区)

土坑1

- 図版14 出土遺物 (1990年度調査区)
土坑 1
- 図版15 出土遺物 (1990年度調査区)
土坑 1・2, 包含層
- 図版16 出土遺物 (1990年度調査区)
包含層
- 図版17 出土遺物 (1990年度調査区)
包含層
- 図版18 出土遺物 (1990年度調査区)
包含層
- 図版19 出土遺物 (1990年度調査区)
包含層
- 図版20 出土遺物 (1990年度調査区)
丘陵斜面部
- 図版21 出土遺物 (1990年度調査区)
丘陵斜面部
- 図版22 出土遺物 (1990・1991年度調査区)
丘陵斜面部, 谷部
- 図版23 出土遺物 (1991年度調査区)
5・6号墳

付図目次

- 付図1 第Ⅰ区遺構全体図
- 付図2 第Ⅱ区遺構全体図
- 付図3 第Ⅲ区遺構全体図

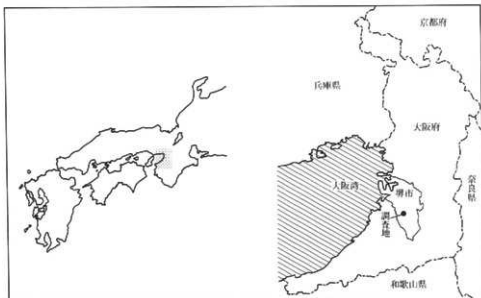
第I章 はじめに

第1節 調査に至る経過

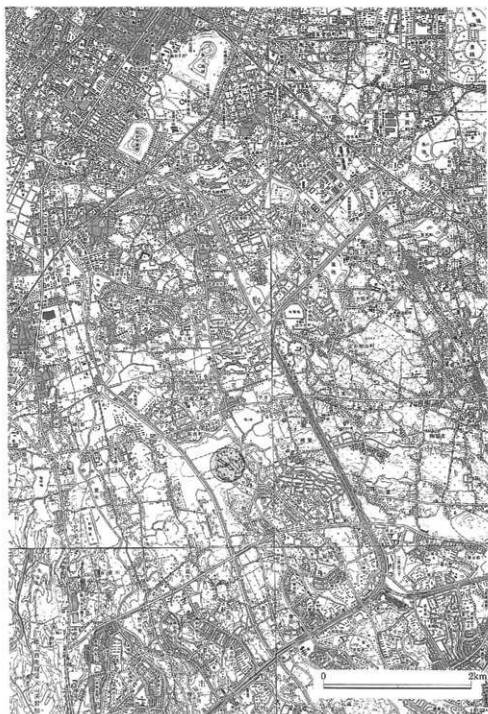
伏尾遺跡は、堺市伏尾・平井・小代にまたがって所在している。以前より遺物の散布する遺跡として周知されていたが、遺跡の詳細は本格的な発掘調査が行われていなかったため不明であった。

しかし、1980年代になり関西国際空港の建設に伴う関連事業として、この地を通る近畿自動車道松原さみ線建設が具体化し、日本道路公団と大阪府教育委員会では路線内の遺跡の取り扱いについて協議を重ねてきた。大阪府教育委員会ではより具体的な遺跡の実態確認のために日本道路公団から依頼を受け、まずは試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が1987年8月と1988年3月に実施し、道路計画部分のほぼ全域で遺構・遺物を確認した。

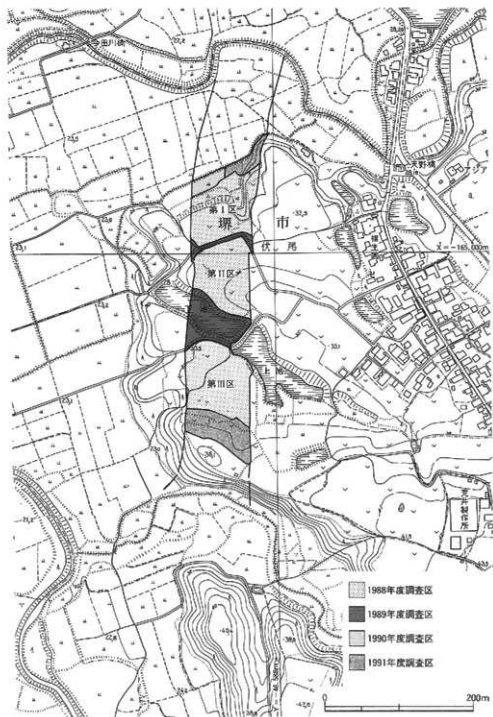
試掘調査の結果を受けて大阪府教育委員会では、対象地の全面発掘調査の必要を認め、日本道路公団に通知するとともに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会に発掘調査の委託を行った。



第1図 大阪府位置図



第2図 伏尾遺跡の位置



第3図 調査区位置図

発掘調査は、用地の関係もあり1988年度から1991年度まで継続的に行った。1988年度は道路本体部分（A地区）約18,000㎡とインターチェンジ部分（B地区）約11,200㎡、1989年度は本体部分（A地区）3,200㎡について実施し、1990年度と1991年度は本体部分で未調査地として残存した調査区の北端部約2,550㎡と南端部約2,640㎡について実施した。

なお、これらの調査では調査の進展とともに重要な遺構が次々と検出され、調査終了後の埋め戻しには砂による遺構面の保護が行われている。

整理調査については調査終了後適宜行い、1988年度の調査区については『陶邑・伏尾遺跡A地区』、『伏尾遺跡B地区』、1989年度調査区については『陶邑・伏尾遺跡A地区II』として報告書を刊行し、整理調査を終了している。

第2節 調査の方法（第3・4図）

調査区の設定

伏尾遺跡は道路本体部分をA地区、インターチェンジ部分をB地区とし、さらにA地区では、溜池や里道によって分断されるため第3図に示したようにⅠ～Ⅲ区の調査区を設定した。

今回報告する1990年度と1991年度調査区は1990年度が第Ⅰ区の北端、1991年度が第Ⅰ区の北端と第Ⅲ区の南端に該当する。

調査区内の地区割り

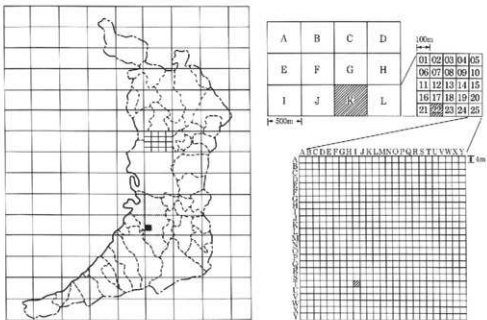
協会では、発掘調査・整理調査の標準化を目指すため、一定の基準を定め調査規程を作成している。調査区の地区割りもこの規程に従って以下の通り行っている（第4図参照）。

まず、遺跡の位置は新平面直角座標系を使用して表示する。

遺跡内の地区割り（区割り）は1/2500の地形図を12等分して500m×500mの区画をつくり、A～Lまでの記号で示す。次に500m×500mの区画を25等分して100m×100mの区画をつくり、01～25までの数字で示す。さらに100m×100mの区画を625等分して4m×4mの区画をつくる。この4m×4mの区画は列・行の順で2文字のアルファベットで示す。一例を示すと第4図の斜線部は大E-5-5-K22TIとなる。

遺物の取り上げ・登録

遺物の取り上げの出土位置については上記の地区割りを基本とし、4m×4mの単位でおこなった。遺物登録は各年度の調査で行い、連番で登録番号を与えている。



※ 斜線部は大E-5-5-K22T1である。

第4図 調査区地区割り模式図

遺構番号

遺構番号は各年度の調査区毎で与えているが、本報告では煩雑化を避けるため新たな遺構番号を付加した。なお調査時の番号も併記している。

遺構の種類

遺構の性格を示す略号は調査規程により以下の通り定められおり、調査時にはこの略号によって調査を進めた。しかし、本報告では遺構種類をそのまま明記し、略号は併記するにとどめた。

- OB (建物) OD (竪穴住居) OO (土坑) OP (ピット)
 OS (溝) OG (古墳) OX (不明遺構)

遺構の図面

遺構の図面は航空測量を実施し、調査地全域で1/20・1/100の平面図と遺構図を作成している。また、調査中には遺跡の細部の情報を得るため遺物出土状況図や地層断面図などを適宜作成した。

第II章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置（第2図）

伏尾遺跡は、大阪府堺市伏尾・小代・平井付近一帯に位置する。堺市は、大阪府南部に細長く延びる泉州地域の北部域にあたり、市域の西側は大阪湾に面し、大和川によって限られる北側は大阪市、南側は高石市、和泉市、河内長野市、東側は松原市、大阪狭山市などと接する。市域のおおまかな地形は、海岸部に近い北西部に広がる平野部と、南東部に広がる丘陵地に分けられるが、伏尾遺跡は、このうち泉北丘陵と呼称される丘陵地帯に立地している。

この泉北丘陵は、1960年代からニュータウン開発が進められ、宅地造成や道路建設によって、当時の地形は大幅に改変されている。このため、現状ではおおまかにしか開発以前の景観をうかがうことはできない。ただ、伏尾遺跡周辺は大規模開発による破壊を免れた地域であり、高速道路建設以前は当時の景観が比較的良好に残存していた。

第2節 地理的環境

西側を弓状に細長く延びる泉州地域は、西側を大阪湾に面し、東側には和歌山県との泉境となる和泉山脈が南北に連なっている。この山地を背後にして、その前面には丘陵部、段丘部、平野部が形成されている。特に、平野部の発達が顕著に見られる北部域では海岸線に沿って砂州が発達し、段丘との間には後背湿地が形成され、肥沃な生産地としての役割を果たしてきたことがうかがえる。丘陵は和泉山脈から派生し、数多くの中小河川がこれらの丘陵を開析する。このため、丘陵・段丘部の周辺には河川の開析作用による大小の谷地形が見られ、狭小な沖積地が形成されている。

堺市の南東部に広がる泉北丘陵も、和泉山脈から北西方向に向かって派生し、丘陵の先端部付近は緩やかな傾斜をもつ段丘地形となり平野部へとつながる。丘陵や段丘の間は、蛇行しながら走る石津川やその支流である和田川、陶器川などによって開析され、中流域では河川周辺に狭小ながら沖積地が形成されている。

伏尾遺跡は、この泉北丘陵の中で高蔵丘陵と呼称される丘陵からのびる中段段丘の北端部付近に立地する。遺跡の平均標高は約20～30mである。

第3節 考古学的環境（第5図）

泉北地域の考古学的成果は、1960年代に始まったニュータウン開発や1980年代に始まった道路建設などに伴う調査によって、多くの蓄積が成されている。ここでは、これらの調査成果を踏まえて、本報告の中心的な時期である古墳時代の伏尾遺跡の位置を明確にするため、泉北丘陵やその周辺地域（泉州北部域）の弥生時代から古墳時代の様相を概観しておく。

弥生時代 泉州北部地域で、弥生時代前期の遺跡としては石津川下流域に立地する四ツ池遺跡の存在が目される。四ツ池遺跡は、縄文時代から継続する集落であり、泉州地域でも比較的早い時期に、弥生文化を受容した集落である。一方、泉北地域では、小阪遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡などの存在が知られているが、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡は、出土遺物から判断して四ツ池遺跡に遅れて前期後半から弥生文化を受容したことが推定されている。また、最近の調査では小阪遺跡で、縄文晩期の榎痕土器や弥生前期中段階土器の出土が確認され、注目されている。しかし、水田開発については遺跡の状況から判断して遅れると予想されている。泉州地域でも、弥生文化の受容の過程とその状況は集落によって異なることが看取されよう。

中期になると、全体的に遺跡数は急増する。泉北丘陵でも、前期から継続する鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡の他に、毛穴遺跡、万崎池遺跡、野々井遺跡などが出現する。このうち、西浦橋遺跡では大規模な水利施設が検出されている。地形的に制約される泉北地域でも、耕地開発が積極的に行われ、耕地の拡大とともに集落が拡散し、新たな集落も成立したと推定されよう。しかし、これら泉北地域に展開する集落は遺跡や遺物の状況、地形的な制約からの生活基盤などから判断して、いずれも小規模な集落であったと考えられる。

一方、石津川下流域に立地する四ツ池遺跡は、中期になると集落規模を拡大させるとともに、環濠の機能も備えたと推定される大溝も掘削され、泉州北部地域の中でも大規模な集落として発展していく。四ツ池遺跡と泉北丘陵の集落間には、石津川を媒介として拠点的な集落と一般集落として、密接な集団関係があったことも予想されよう。

弥生時代でも、中期末から後期になると新たに丘陵上で集落の展開がみられる。高蔵丘陵の伏尾遺跡、榎丘陵の野々井遺跡、信太丘陵の昭和池遺跡などである。これらの集落は、その立地から、いわゆる高地性集落との関連が考慮されるが、石鏝などの出土量、集落の様相からは一般集落と考える方が妥当である。

弥生時代末については良好な資料は少ないが、沖積段丘の縁辺部など、比較的低位部での展開が予想される。

古墳時代 泉北地域における古墳時代前期の集落は確認例が少なく、大庭寺遺跡、伏尾遺跡、野々井遺跡などが代表的な遺跡である。

大庭寺遺跡では、布留式土器の古い段階から継続して存続するが、遺構・遺物の様相から判断して、集落規模は小規模であったと予想される。一方、伏尾遺跡は、周辺域で中期に属する古墳（小代古墳群）が確認されており、前期においても、有力地域集団であった可能性はある。野々井遺跡についても、遺構の検出状況などからは伏尾遺跡と同様の可能性が考えられよう。

古墳については、前期まで遡るものとして、埋葬施設に和泉砂岩製の割竹形石棺を採用した二本木山古墳が知られている。また、先述したが、小代古墳群も中期でも須恵器出現以前の段階に属し、地域首長層の墓とされよう。ただ、泉北地域は、首長層の墓と推定される古墳は確認されているが、前述した遺跡の集落規模などからは、前代同様、地域として飛躍的に発展した傾向は見いだすことはできない。

泉北地域が大きく開発されるのは、須恵器生産開始以後であり、「陶邑」として全国規模で歴史的舞台上に登場する。

陶邑で生産開始された頃の初期段階の窯としては、TK73号窯、TK85窯、濁り池窯などが知られていた。しかし、大庭寺遺跡で、より陶質土器に近い製品が生産されたことが確認され、須恵器生産導入期の窯が陶邑の中にも存在したことが明らかとなり、須恵器のはじまりについて大きな問題を投げかけた。また、近年の調査では、大庭寺遺跡だけでなく、高蔵地区ではTK216型式からTK208型式の初期須恵器を伴う伏尾遺跡、TK73型式併行期に出現する小阪遺跡など、須恵器生産に関係したと考えられる集落の資料も蓄積された。窯や遺物からだけでなく、集落の動向から陶邑の成立過程の状況も明らかとなってきた。

泉北地域は、古墳時代中期以降この須恵器生産によって、大きく開発されるが、地方窯成立後も、開発は一層活発化する。窯や集落が増加し、これに伴い造墓活動も活発化し、カマド塚と称される埋葬施設をもつ桧尾古墳群・陶器千塚など特異な形態の古墳も出現していく。陶邑が、須恵器生産を基盤とした社会的位置を確立したと理解されよう。しかし、その一方で、旧河川の洪水の状況からは、陶邑の発展とあいまって森林伐採などが急速度で進んだこともうかがえる。発展の代償として大きな自然破壊が行われたことも、泉北地域の歴史の中では、重要な事実として受け止めなくてはならない。

第三章 遺跡の概要

第1節 既往の調査（1988・1989年度の調査）

両年の調査では、弥生時代から古墳時代後期を中心とした遺構・遺物が多数検出され遺跡の全体がほぼ明らかとなった。ここでは時代毎に主な成果をまとめておく。

弥生時代では中期末から後期にかけての竪穴住居が計15棟検出され、泉北丘陵における中期末以降の集落経営の状況が明らかとなった。さらに、調査区周辺の地形や遺物の散布状況からは集落がさらに大きく広がることも確実視され、弥生時代の伏尾集落は泉北丘陵の中では比較的規模の大きい中心的な集落であったことも予想された。その後も古墳時代前期になっても、いわゆる布留期の住居が3棟検出されており、前代からの継続的な集落経営も予想された。

須恵器生産開始間もない頃、古墳時代中期になると伏尾遺跡の様相は一変し、検出された遺構や遺物は質・量共に前代に比べ卓越したものとなる。遺跡は調査区のほぼ中央に刻まれた開析谷により北側の丘陵（Ⅰ・Ⅱ区）と南側の丘陵（Ⅲ区）に分断され、北側丘陵は集落域、南側丘陵は墓域であったことが確認された。

集落は掘立柱建物と竪穴住居で構成される。

掘立柱建物は31棟が検出されたが、平面形、柱構造、規模などから、住居、倉、納屋などに推定されるものが混在する。その数は住居13棟、倉12棟、納屋6棟である。竪穴住居3棟検出された。いずれも平面形は方形を呈し、造り付けのカマドを持つ。数の上では掘立柱建物が竪穴住居を圧倒し、さらに両建物の立地を比較すると、その選地には掘立柱建物が優位性が認められた。当集落では掘立柱建物を中心として集落が構成されたことがうかがえた。

建物以外の遺構としては溝・土坑などがある。

溝は排水だけでなく区画的な性格も備えていたと推定されるものがある。集落はこの溝によって数群に区画されていた可能性が高く、建物数や立地などから調査区ほぼ中央付近（Ⅱ区）に優位性が認められた。土坑は出土遺物や埋土の状況に特徴的なものが存在した。埋土に焼土や炭化物を多く含み、出土遺物に日常土器である軟質系土器が多くみられる土坑である。このような土坑の存在からは、この土坑の周辺に日常生活に関係した作業場の

存在が推定された。

墓域では方墳3基と円墳1基（方墳の可能性もある）の計4基が確認された。いずれも後世の削平が著しく、周溝部のみの検出に留まった。

1号墳（41-OG）は一辺約16mの方墳で、周溝内から家形埴輪、朝顔形埴輪、円筒埴輪などの埴輪類や、器台、壺、高杯などの須恵器が墳丘から転落した状況で多量に出土した。2号墳（689-OG）は1号墳の西側に近接して位置する方墳である。規模は一辺7mで、検出された古墳の中では最も小規模なものであり、遺物も円筒埴輪が2個体分出土したのみである。3号墳は（40-OG）は一辺14mの方墳、4号墳は（39-OG）は直径11mの円墳で、両墳とも削平が著しく、周溝の底面がわずかに検出されたのみである。

このように当古墳群は全体的に小規模な方墳を主体として構成される。しかし、同じ陶邑の裾地区に位置する野々井遺跡では、小規模古墳の他に、大型方墳や全長20～30mの前方後円墳、帆立貝式古墳など、墳形・規模が卓越した一群の存在が認められる。野々井遺跡では首長層とやや下位の集団層の被葬者像の存在が読みとれ、伏尾遺跡の古墳群でも実際に検出はされていないが、野々井遺跡と同様の古墳群の展開が予想された。

当調査において古墳時代中期では上記のように集落と古墳群が良好な状況で検出され、集落構造や集落と古墳群の関係などが把握されるとともに、豊富な出土遺物からは当集落の出現から存続期間が田辺編年のTK216～TK208型式の短期間であったことも確認された。

当集落の成立は、まさに「陶邑」で須恵器生産の量産化が始まる時期と一致する。さらに、集落の立地や構造、出土遺物の内容も考えあわせると、当集落が「陶邑」の発展期に須恵器生産に深く関与した集団によって営まれたものと推定された。

古墳時代中期以降、調査区内では集落の存在は確認されていない。南側丘陵（Ⅲ区）で古墳時代後期の墓と推定される不定形土坑群、北側丘陵（Ⅱ区）の斜面地で後期末の須恵器窯が検出されたのみである。

古墳時代以降になると開発の波は一端途切れる。次時代の開発は中世後期から始まり現代まで連続する耕地開発である。この一連の開発により、古墳群の一部が削平されたことが当調査でも確認された。

なお、今回報告を行う調査区は、1990年度調査区が、古墳時代中期の集落が展開する北側丘陵（Ⅰ・Ⅱ区）北側前面に広がる沖積段丘面、1991年度調査区が1998年度に調査した谷部1と呼称した開析谷の開口部付近と古墳群の展開する南側丘陵（Ⅲ区）の南端部にあたる。

第2節 周辺域の調査

伏尾遺跡は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会（以下協会）の他、財団法人大阪文化財センター（以下センター）や堺市教育委員会（以下堺市）によっても調査が行われている。ここでは両組織で行われた調査について触れておく。

センターの調査は、古墳群が検出された南側丘陵（Ⅲ区）の南側に開析された谷部と谷の南側に広がる丘陵部を対象として行なわれた。

丘陵部の調査では古墳3基が検出された。このうち2号墳は直径約32mの円墳で墳丘に円筒埴輪列を巡らしていた。埴輪の時期は川西編年のⅢ期に比定され、この古墳は須恵器出現以前の段階に築造された当地域の首長墓と推定された。この古墳の存在が明らかになったことにより、協会調査区で明らかとされた須恵器出現以後の古墳との比較検討をより詳細に行うことが可能となり、古墳から「陶邑」の成立について解明が期待された。

堺市の調査は、古墳時代中期の集落が展開する北側丘陵（Ⅰ・Ⅱ区）の北東端付近を対象として行なわれた。古墳時代中期の竪穴住居、溝、土坑などが検出され、このうち、竪穴住居は周堤やその回りに排水溝を巡らす得意なものであった。さらに出土遺物に滑石製石製品などが見られる特徴があり、住居廃絶時における祭祀行為が復元され、集落構成上特別な意図をもった住居であったと推定されている。

堺市の調査により、集落規模が協会調査区からさらに東側に広がることが確認されるとともに、集落構成を考える上で更なる検討が必要とされた。

参考文献

- 大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 「陶邑・伏尾遺跡A地区」1990
- 大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 「陶邑・伏尾遺跡A地区Ⅱ」1992
- 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 「大庭寺遺跡Ⅱ・伏尾遺跡Ⅰ」一調査の概要-1992
- 堺市教育委員会「小阪遺跡発掘調査概要報告 一堺市伏尾（KSK-1）地点一」
『堺市文化財調査概要報告第34冊』1993

第Ⅳ章 集落部の調査

第Ⅰ節 概要（第6・7図、付図1・2、図版2・3）

伏尾遺跡の調査では、第Ⅱ章でも記述したように、調査地が溜池や里道によって分断されるため、溜池から北側の丘陵をⅠ・Ⅱ区、南側の丘陵をⅢ区として調査区を設定した。

（第3図参照）

このうち、集落は現在は溜池として利用される開析谷の北側の丘陵部（Ⅰ・Ⅱ区）一面に広がることが確認されている。また、Ⅰ区の丘陵北東部には遺跡の北側を流れる陶器川に向かって開口する小開析谷が刻まれ、投棄された状態で多量の遺物が出土した。

今回報告する調査区は、この集落が展開する丘陵の前面に広がる平地部と呼称した沖積段丘と谷部の開口部付近に位置しており、1990年度に平地部、1991年度に谷部の調査を行った。

以下、平地部と谷部に分けてその概要を記す。

1998年度の調査で確認された集落の展開する丘陵の北側前面に広がる平地部と呼称した沖積段丘部は、遺跡の北側を流れる陶器川に向かって徐々に低くなる。このうち1990年度調査地は丘陵崖の下端縁辺部に近接した沖積段丘部でも標高の比較的高い場所に当たる。標高は、古墳時代中期の遺構検出面で約22.4mを測り、集落の展開する丘陵との標高差は約7mを測る。

地層の地積は古墳時代中期の遺構面から、表土除去面まで約40～60cm程あり大きくは2層に大別される。上層は褐色系の砂混じり粘質土で耕作土層と考えられる。層厚は約30～40cmあり、数層に細分される。所属時期は中世～近世と考えられる。下層は黒褐色砂混じり粘質土で、古墳時代中期の遺物を多く包含する。この包含層の除去面が古墳時代中期の遺構検出面となる。また、遺構が検出される基盤層は縄紋時代の堆積層と推定される。

古墳時代中期の遺構群は調査地のほぼ全域で検出され、方形土坑2基を中心として、その周りに掘立柱建物を配していたことが確認された。土坑はいずれも浅いものであったが土坑1からは多量の須恵器が出土した。掘立柱建物は計14棟が検出されたが、その多くが平面形から倉とされるものであった。このような、土坑の周りに倉を中心とした建物群を配する集落単位は、丘陵部の集落では確認されていない。さらに、集落立地も考慮すれば、

丘陵部の集落とは性格的に異なることなることが推定された。

平地部の調査は当初の予想以上に大きな成果が得られ、この成果は伏尾遺跡の集落構造を解明する上で重要なものとなった。

1991年度に調査を行った谷部は、1988年度にⅠ区の丘陵北東側に刻まれた開析谷の開口部付近にあたる。前調査によって、この谷部の状況についてはほぼ把握されており、今回の調査では平地部で検出された掘立柱建物群に関連する遺構の検出が期待された。

しかし、調査では明確な遺構は検出されず、谷開口部付近の地層の堆積状況を把握したに留まった。また、前回の調査では遺物も多量に出土したが、今回の調査では比較にならないほど少量であった。

なお、当年の調査では、谷部を挟んだ東側の丘陵斜面部の一部が調査区内に含まれた。限られた面積のため十分な調査は行えなかったが、斜面下端部を地形にそって走る溝などを検出した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と推定され、谷部東側の丘陵部に当該期の遺構の存在が予想された。ただ、第Ⅲ章で紹介した堺市教育委員会が行った調査などを参考にすれば、積極的に丘陵全域にわたる遺構群の展開を予想することはできない。むしろ、丘陵斜面下端部を地形に沿って走ることを重視すると、谷部から取水する水路の可能性もあり、実際には検出されていないが、溝の延びる北東の沖積段丘面から沖積平野に当該期の水田の存在が予想される。

第2節 検出された遺構と遺物

第1項 掘立柱建物

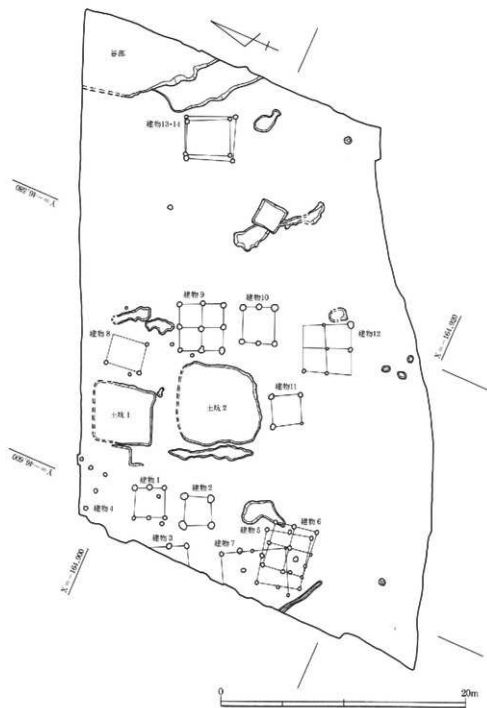
掘立柱建物は計14棟を検出した。重複関係のある建物も存在し、数次期に及ぶ建て替えがうかがえる。建物の時期は、柱穴内より時期を決定つけるような遺物の出土はないが、包含層や建物に関係すると考えられる土坑の出土遺物から5世紀後半の限られた時期に比定される。以下、各建物について詳説する。

建物1【5-OB】(第7・8図・図版4・5)

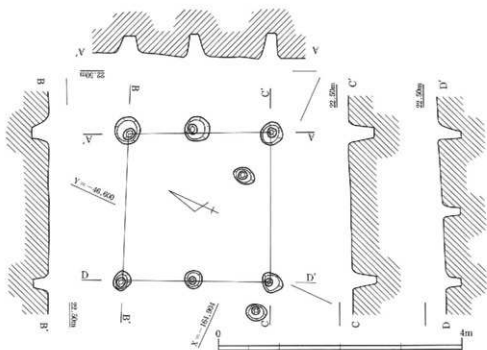
調査区西端、土坑1・2の西側に位置する。方位は、南北軸線方向でN-24°-Wを指す。建物規模は南北2間(約2.4m)×東西1間(約2.4m)と小規模で、平面形はほぼ正方形を呈する。桁行の柱間距離は1.07~1.30mである。



第6図 集落部の遺構概略図 (1988・1990年度調査区)



第7図 1990年度の調査で検出された遺構群



第8図 建物1 (5-OB) 平・断面図

柱穴規模は直径0.3~0.4m、深さ0.3~0.4mで、残存状況は良好である。埋土はいずれも褐灰色砂混じり粘質土で、柱痕跡は認められなかった。建物北東隅の柱穴における埋土上層からの須恵器片の出土状況なども参考にすれば、当建物は柱が抜き取られた可能性が高いと判断された。

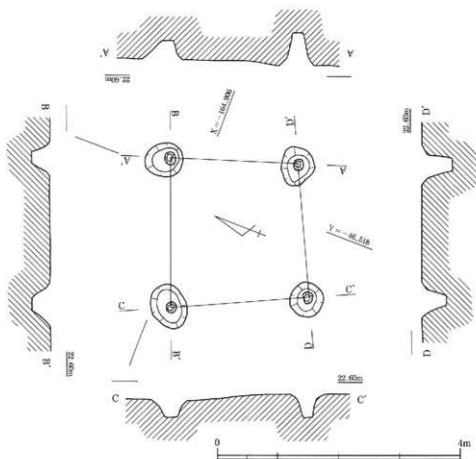
遺物は上述の柱穴の他、南東隅柱穴などからも土師器の細片が出土している。

建物2【15-OB】(第7・9図、図版4・5)

土坑2の西側、建物1の南側に近接して位置する。方位は南北の軸線でN-24°-Wを指し、建物1とはほぼ同軸である。建物規模は1間(南北方向2.1~2.3m)×1間(東西方向2.2~2.4m)と小規模で、平面形はほぼ正方形を呈する。

柱穴規模は直径約0.6m、深さ0.3~0.5mで、他の建物より大型である。埋土は多くのが2層に細分され、上層が褐灰色砂混じり粘質土、下層が黒褐色粘土である。柱痕跡はいずれの柱穴でも認められなかった。

遺物はいずれの柱穴からも須恵器や土師器片が出土した。特に北東柱穴では埋土上層から比較的まとまった状態で土師器片が出土した。柱痕跡が認められないことなどを考え合

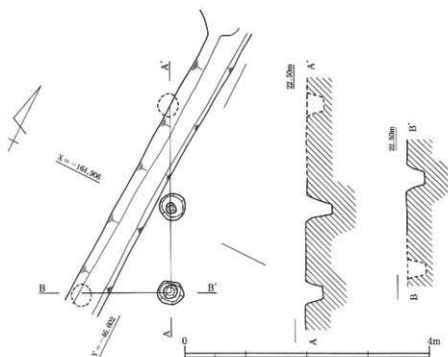


第9図 建物2 (15-OB) 平・断面図

わねると、この土器は柱抜き取り後の埋め戻し時に意図的に埋納された可能性が高いと判断された。なお、前述の通り、当建物の柱穴規模は他より大型で、柱規模から上部構造は他の建物を卓越したものであったと推定できるが、柱抜き取り時に柱穴掘方を拡大した可能性もあり即断はできない。

建物3【11-OB】(第7・10図・図版4・5)

調査区の西端、建物1・2の西側に近接して位置する。方位は南北の軸線で $N-27^{\circ}-W$ 指し、建物1・2とほぼ同軸である。調査区の関係上、柱穴は南東2間分と南1間分しか検出できなかったが、他の建物を参考にすれば2間×2間の総柱建物であった可能性が高い。柱穴間の距離は1.37~1.48mである。



第10図 建物3 (11-OB) 平・断面図

柱穴規模は直径約0.4m、深さ0.3~0.4mである。埋土は黒褐色砂混じり粘質土や黒色粘土で、柱痕跡は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

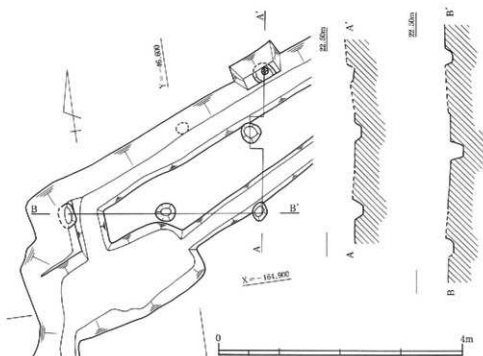
建物4【103-OB】(第7・11図・図版4)

調査区北西端に位置する。調査区の関係上、建物の南東部の検出に留まった。検出時は建物19のような2間(3m)×2間(2.4m)の建物に復原したが、南北方向の柱筋では柱間の距離がまばらであり中央の柱穴も通り難いことから、建物1のような2間×1間の構造であった可能性もある。

柱穴規模は直径約0.3m、深さ0.15~0.25mで、残存状況は悪い。埋土は黒褐色砂混じり粘質土である。遺物は須恵器や土師器の細片が出土した。

建物5【19-OB】(第7・12図・図版4)

調査区西側、建物1~3の南側に位置する。建物6と重複するが、柱穴の重複関係が認められないため、これらの建物との前後関係は不明である。方位は東西の軸線でE-12°-Sを指す。規模は東西2間(約4.2m)×南北2間(3.6~3.7m)で、平面形はやや東西方向に長い長方形を呈する。



第11図 建物4 (103-OB) 平・断面図

柱穴規模は直径0.3～0.4m、深さ0.14～0.42mで、各軸線の中央柱穴が他より浅くなる傾向がある。埋土は褐灰色砂混じり粘質土で、柱痕跡の確認できるものも存在した。

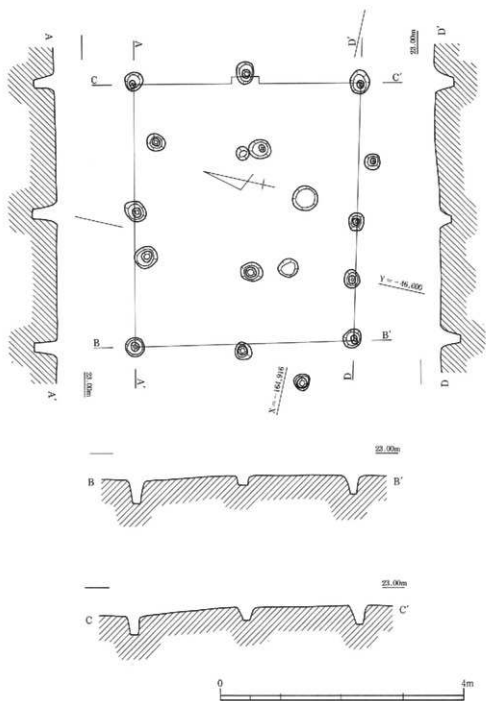
遺物は東西方向の南筋の中央柱穴から土師器の細片が出土したのみである。柱痕跡の確認されない建物1・2に比べると極めて少ないことがうかがえる。

建物6【27-OB】(第7・13図・図版4)

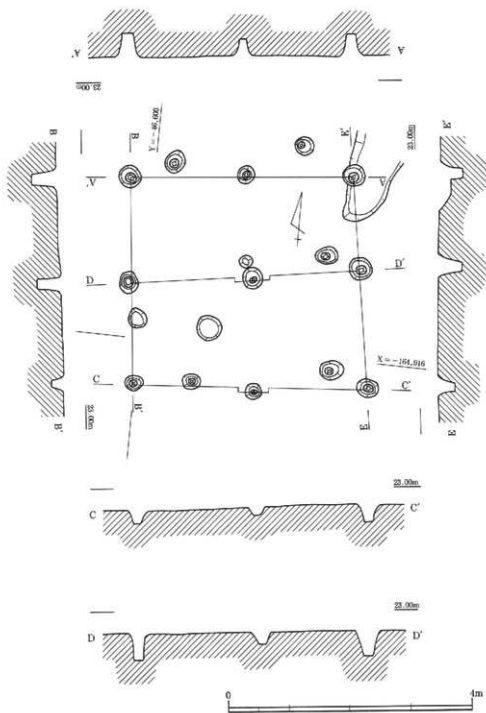
調査区西側、建物5と重複して検出された2間×2間の総柱建物である。方位は東西の軸線でE-7°-Sで、建物5よりやや南方向に振れる。規模は東西方向3.7～3.8m、南北方向3.4～3.5mで、平面形はやや東西方向に長い長方形を呈する。

柱穴規模は直径0.3～0.4m、深さ0.11～0.41mで、深さにはばらつきがみられた。埋土は褐灰色砂混じり粘質土で、柱痕跡は確認されなかった。遺物は北東隅柱穴などから土師器片が出土している。

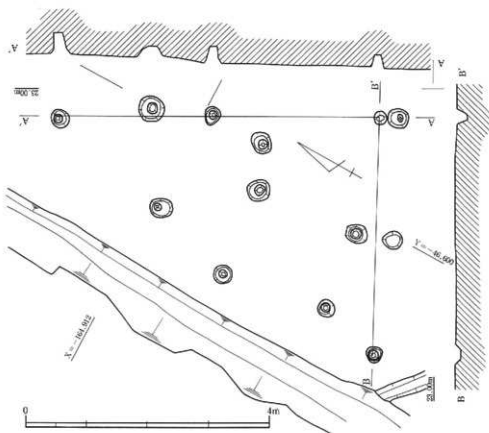
なお、建物5・6の前後関係については、柱痕跡が建物5で確認され、当建物で確認されなかったことを根拠にすれば、建物6が建物5に先行する可能性が高いとされる。



第12圖 建物5 (19-OB) 平・断面圖



第13圖 建物6 (27-OB) 平・断面図



第14図 建物7 (70-OB) 平・断面図

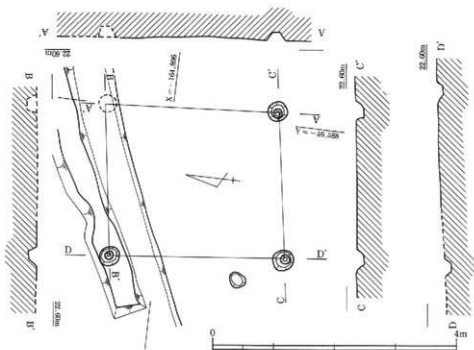
建物7【70-OB】(第7・14図, 図版4)

調査区西端に位置し、調査区の関係上全体構造は把握されていない。南北2間(5.2m)×東西2間(3.8m)の、平面形が長方形を呈する建物と推定されるが、柱穴は小規模で浅く、柱筋も通り難く建物とするには疑問点が残る。方位は南北の軸線が建物1～3とはほぼ同方向である。

建物8【78-OB】(第7・15図, 図版4)

土坑1の東側に位置する。建物規模は1間(2.8m)×1間(2.4m)と小規模で、平面形は南北に長い長方形を呈する。方位は南北の軸線で $N-5^{\circ}-W$ である。

柱穴は、直径約0.3m、深さ約0.1mで、建物が丘陵斜面部に近い場所に位置するため後世の削平が著しい。埋土は黒褐色砂泥じり粘質土で、柱痕跡の有無は柱穴の残存状況が悪



第15図 建物8 (78-OB) 平・断面図

く把握できなかった。

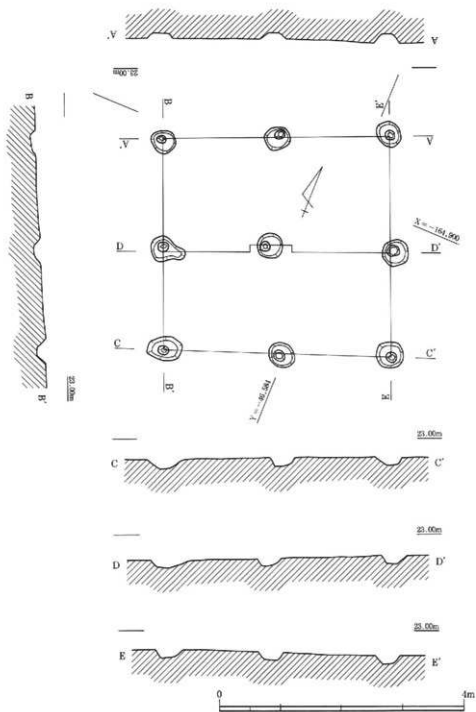
遺物は南西隅柱穴から須恵器の細片が出土しているが、建物に直接伴うものではない。

建物9【53-OB】(第7・16図・図版4)

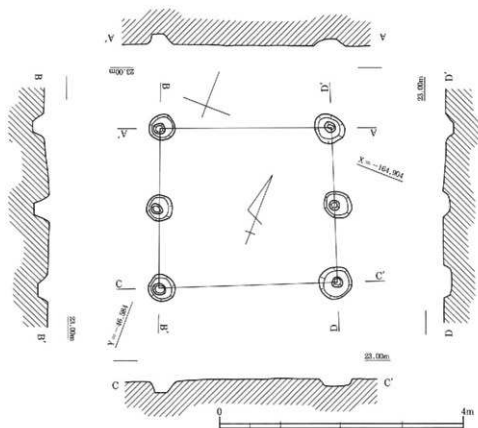
調査区の中央付近、土坑2の東側で検出された2間×2間の総柱建物である。建物規模は南北方向3.4~3.6m、東西方向3.7m、柱間距離は1.7~1.9mを測る。わずかに東西方向に長いが、他の建物と比較すると平面形は正方形に近い。方位は南北方向の軸線で、N-23°-Wを指す。

柱穴規模は直径約0.4m、深さ0.1m前後で、後世の削平のためか残存状況は悪い。埋土は黒褐色砂泥じり粘質土である。柱痕跡の有無は、前述のとおり柱穴の残存状況が悪く確認できなかった。

遺物は北東隅柱穴から須恵器の細片が出土していたが、建物に直接伴うものではない。



第16图 建物9 (53-OB) 平・断面图



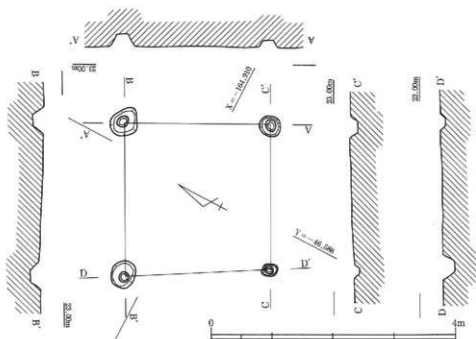
第17図 建物10 (47-OB) 平・断面図

建物10【47-OB】(第7・17図, 図版4)

建物9の南側に位置する。南北方向2間(2.5m)×東西方向1間(2.8~2.9m)の建物で、平面形は若干東西方向に長いが正方形に近い。平面形や規模は若干異なるが、建物1と類似した建物構造のものとして推定される。南北柱筋の柱間距離は1.0~1.3mで東西柱筋同様ばらつきがみられる。方位は南北方向の軸線でN-20°-Wを指し、建物9・12とはほぼ同軸である。

柱穴は直径約0.4m、深さ0.15~0.20mで、後世の削平のため残存状況は悪い。埋土の観察からはいずれの柱穴にも柱痕跡が認められ、堀方埋土(黒褐色砂混じり粘質土)には、遺構ベース土がブロック状に含まれることも確認された。

遺物は南東隅柱穴などの堀方内から、土師器が出土しているが、いずれも相片で建物に直接伴うものではない。



第18図 建物11 (36-OB) 平・断面図

建物11【36-OB】（第7・18図・図版4）

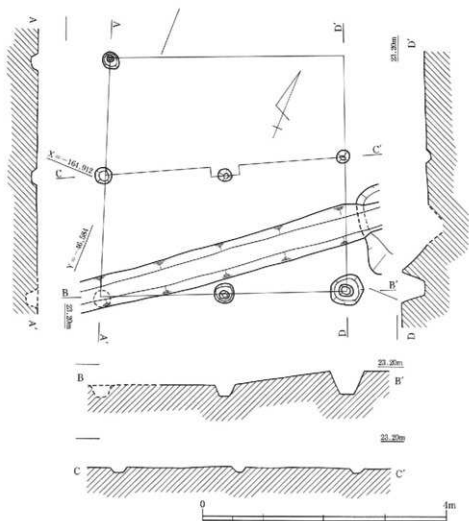
土坑2の南側に位置する1間×1間の小規模な建物である。柱間距離は2.34～2.48mとばらつきがあり、平面形も正方形に近いがややびつである。柱構造や規模から建物2と類似した建物と推定される。方位は南北軸線で、 $N-28^{\circ}-W$ を指し、建物9・10とほぼ同軸である。

柱穴は直径0.3～0.4m、深さ0.08～0.20mで、建物南側の削平が特に著しい。埋土は黒褐色砂混じり粘質土である。柱痕跡の有無は、前述のとおり柱穴の残存状況が悪く確認できなかった。

遺物は北東柱穴より土師器の細片が出土しているが、建物に直接伴うものではない。

建物12【40-OB】（第7・19図・図版4）

土坑2の南東、建物10の南側に位置する。後世の削平が著しく、建物を構成する全柱穴は検出されなかったが、2間×2間の総柱建物と推定される。建物規模は南北約4m、東西約4mで、平面形はほぼ正方形を呈する。柱間距離は1.9～2.1mである。方位は南北方向の軸線で $N-20^{\circ}-W$ を指し、近接する建物9・10とほぼ同軸である。

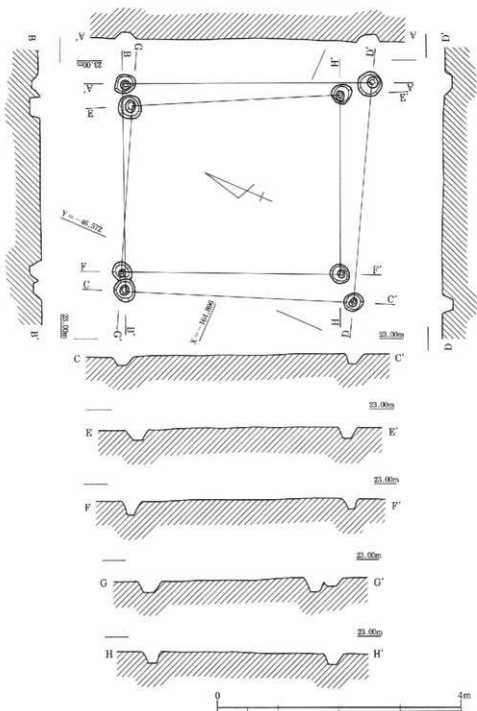


第19図 建物12 (40-OB) 平・断面図

柱穴は残存状況の良いもので直径0.5m、深さ0.4mを測る。埋土は黒褐色粘質土で、残存状況の良い南東隅の柱穴で柱痕跡が確認された。遺物は出土しなかった。

建物13【62-OB】(第7・20図、図版5)

調査区の東端、建物1～12からは東へ10mほど離れて位置している。建物14と重複するが、柱穴の重複関係から建物14より後出することが確認されている。建物規模は1間(南北方向3.8～4.0m)×1間(東西方向3.4～3.6m)で、柱間にばらつきがあり平面形はやいびつである。方位は南北方向の軸線で $N-20^{\circ}-W$ である。



第20圖 建物13・14 (62・66-OB) 平・断面圖

柱穴は、直径0.3～0.4m、深さ0.15～0.20mで、削平が著しく残存状況は悪い。埋土は黒褐色砂まじり粘質土で、柱痕跡の有無は残存状況が悪いため確認できなかった。遺物は出土していない。

なお、調査区東端では谷部の西肩が確認されており、建物13・14が東建物群の東端域にあたることも今回の調査で確認された。

建物14【66-OB】（第7・20図、図版5）

建物13とはほぼ重なるようにして検出された。建物規模は1間（南北方向3.4～3.6m）×1間（東西方向2.7～3.0m）で、建物13よりやや小規模である。方位は南北方向の軸線でN-24°-Wを指し、建物13より若干西に振る。

柱穴は、直径0.3～0.4m、深さ0.15～0.20mで、建物13同様残存状況は悪い。埋土は黒褐色砂まじり粘質土で、柱痕跡の有無は残存状況が悪いため確認できなかった。遺物は出土していない。

また、建物13・14とも他の建物に比べ柱間距離が長いことがうかがえる。本来は2間×2間の建物で柱間中央の柱穴が削平されたとも推定される。しかし、1990年度の調査では当建物より大型の1間×1間の建物も検出されており、ここでは建物13・14いずれも1間×1間の建物であった可能性が高いとしたい。

以上、当調査区で検出した掘立柱建物について概要を記述したが、ここで建物群の特徴について簡単にまとめておく。

当建物群の特徴はまず柱構造や規模から倉に推定されるものがほとんどで、住居と推定される建物がないことがあげられる。このような建物で構成される単位は丘陵部では確認されていない特徴であり、丘陵部の集落単位とは異なる性格が予想される。

建物建て替えについては、建物の重複関係から建て替えが行われたことは確実である。また、土坑1・2の西側に展開する建物1～3では埋土の観察から柱の抜き取りがうかがえ、東側に展開する建物10・12では柱痕跡が確認できることを重視すれば、ある程度まとまった単位で建て替えが行われたと考えることも可能である。

建物群の展開範囲については、東と南端については当調査で確認された。西側については、建物群の状況などからさらにのびることがうかがえる。北側については財団法人大阪文化財センターによって把握されており、当調査区より若干のびる程度である。

第2項 土坑

今回の調査で検出された土坑は計5基と少ない。このうち土坑1・2は規模や遺物量に眼を見張るものがあり、立地の点から建物群との関係やその性格も重要視された。ここでは、この2基を中心に詳説する。なお、他の3基は、不整形で浅く、自然の落込みの可能性の高いものである。

土坑1【1-00】（第7・21～25図，図版6・12～15）

調査区の北西端に位置し、土坑の西側には建物1・4、東側には建物8が立地する。

土坑の北側は完全に削平されているが、平面形は方形を呈すると考えられる。平面規模は削平により全体を把握することはできないが、東西4.4m、南北は4.5m前後と推定される。深さは最も残存状況の良い場所で約0.14mを測り、削平はされているものの元来も浅いものであったと推定される。

埋土は、土坑下層しか残存しておらず、上層の状況については把握できなかった。土色・土質は炭粒を含むオリーブ黒色粘土である。

遺物は土坑東側でまとまって出土した。ただ、中央から西側は底面近くまで削平が深く及んでおり、元来は土坑全体が東側のような状況であったと推定された。

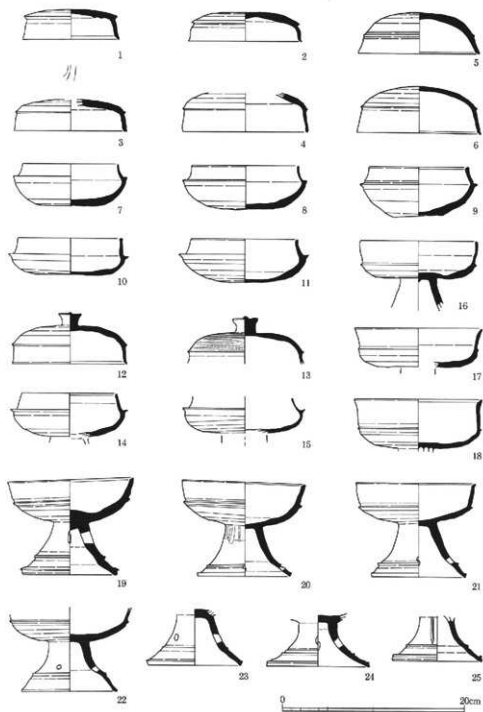
出土遺物の種類はそのほとんどが須恵器で、他に土師器や軟質系土器も含まれる。また、須恵器は破片として出土したが完形品に復原されるものが多くみられ、その中には焼き歪みのある製品もみられた。

以下、土坑1の出土遺物を器種・器形に分けて概観する。

須恵器（第21～24図，図版12～15）

杯蓋（1～6） 1は口径10cmとやや小型で天井部は偏平である。2・3は口径約12cm、天井部がやや偏平で、口縁部は短い。4・6は口径14cm弱、天井部には丸みをもち、口縁部は他に比べ長い。5は口縁部が天井部からそのまま開き、器壁も厚い。1～3・5がこの中では古い段階の諸特徴を備えたものである。

杯身（7～11） 7は口径約10cmとやや小型である。底部は平底気味で、立ち上がりは短く端部は丸く仕上げる。底体部のヘラケズリの範囲は狭い。8は口径約12cm。底部に丸みがある他は、器形・技法の特徴は7と似る。9は口径約11cm。底部は平底で体部は膨らみがなく直線的である。立ち上がりは内傾し、端部は面をもって仕上げる。ヘラケズリは体



第21图 土坑1(1-00)出土遗物1

部下端部まで行い、底部は未調整に近い。10は口径約11cm。底部部は膨らみが少なく偏平で、立ち上がりは直立し端部は面をもって仕上げる。11は8と器形が似るが、底部部のヘラケズリが体部上部にまで及ぶ。

高杯蓋(12・13) 2点のみ図化された。12は口径約12cm。丸みのある天井部から口縁部はまっすぐのびる。13は口縁部を破損するが、やや外に開くものと推定される。天井部の調整は12がヘラケズリ、13はヘラケズリの後に全体にカキ目を施す。つまみはいずれも中央部を盛り上げる特徴を有する。

高杯(14~33) 有蓋高杯と無蓋高杯があるが、圧倒的に無蓋高杯の出土数が多い。

有蓋高杯は2点(14・15)図化されたが、いずれも杯部のみが残存である。14は立ち上がりが内傾するが直線的、15は内湾しながらのびる特徴がある。脚部の形態は残存状況が悪く不明である。

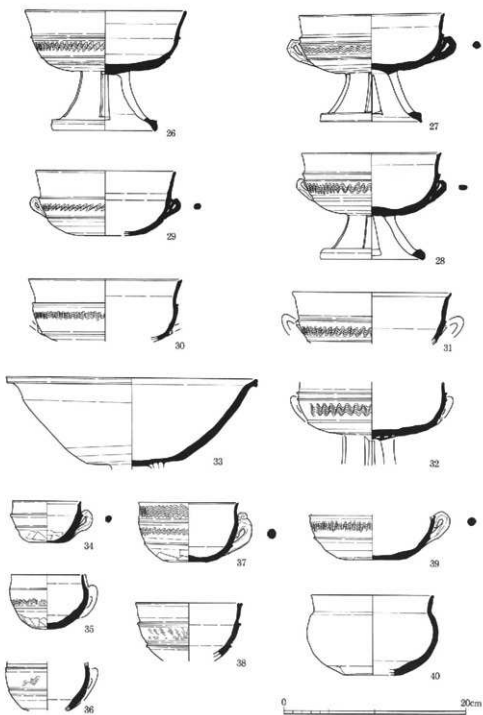
無蓋高杯は、杯部の浅いもの(16~22)と、杯部が鉢形(26~32)を呈するものに分けられる。

前者の杯部(16~22)は前述の杯蓋と同様の形態であり、杯蓋を転用したものと推定される。また、蓋杯では出土していない口縁部が直立し長い形態のもの(18)も、高杯の中には存在する。脚部は、ほとんどが柱部から裾部がそのまま大きく開く形態(16・19~21)で、裾部のやや上方に1条の凸帯を巡らす。他の形態としては柱部から裾部が外方向に屈曲して開く形態(22)があるが、出土数は少ない。透かしは小型円形、涙滴形のもの、柱や裾部に3~4方に配するが、このうち円形のを4方に配するものが多い。

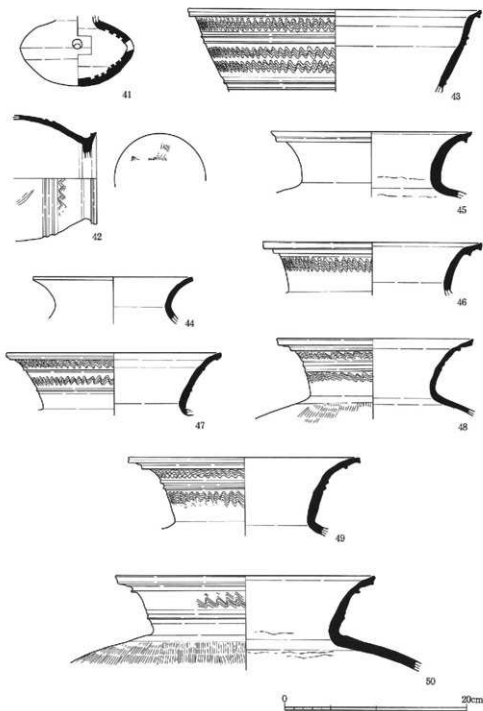
後者の鉢形の杯部を有するもの(26~32)は、いずれも体部を凸帯で区切り、その中には櫛掻きの波状紋を巡らす。また、若干の例外(26)もあるが、この紋様帯には2個の飾りつまみをつける。口縁部の形態は、直立ぎみのもの(27・28)とやや外方に開くもの(29~31)があり、端部も丸く仕上げるもの(26・29)、面をもって仕上げるもの(27・28)などが混在する。口径は約15cm~17cm前後のものがあり、口縁部がやや外方向に開くものが大型となる傾向がみられる。脚部はいずれも4方向に長方形透かしを配する。裾端部は若干上下に肥厚させて面をつくりだすもの(26・27)と上部に肥厚させて丸く仕上げるもの(28)がある。

その他、無蓋高杯では口径約27cmの大型高杯(33)も出土している。平底の底部から屈曲して外方向に口縁部が長くのびるもので、出土例は少ない。

脚部の残存品は3点図示した。このうち24・25は高さ5cm弱と他に比べ低い。



第22図 土坑1(1-00)出土遺物2



第23图 土坑1 (1-00) 出土遗物3

把手付碗(34~39) 6点図示したが、口径から小型(34~36)、中型(37・38)、大型(39)に分けられる。

34は口径7.4cm、器高4.6cm。当土坑の出土品の中でもっとも小さなものであるが、全体に器壁は厚い。体部は底部から直線的にのび、口縁部は短く直立する。35は口径8cm、器高6cm。全体に丸みを持ち、体部中央付近に波状紋を巡らす。把手は欠損するが、痕跡から把手の上端部にも貼付けによる装飾のあったことが観察される。36も35と類似した器形のもので推定される。37は口径11cm、器高6.4cmで、口径に比べ器高の低いものである。体部に丸みを持ち、口縁部と体部に波状紋を巡らす。把手は貼付けによって行い、把手の上部には渦巻き状の装飾を付加する。38は37とほぼ同法量と推定されるが、37に比べ底部付近の膨らみが小さいものである。39は底体部の残存品であるが、その法量から口径は12cmを越えるものと推定される。

なお、底部付近の調整は、静止ヘラケズリ(34・35・37)と回転ヘラケズリ(36・38)が混在するが、静止ヘラケズリで仕上げるものが多い。

鉢(40) 出土数は少なく、1点のみ図化された。底部は平底、体部は丸みを持ち口縁部は短く直立する。体部から口縁部にかけては回転ナデ、底部付近は静止ヘラケズリで仕上げる。

甌(41) 底体部の残存品が1点図化された。底体部は最大径が器高のほぼ中央にあり、やや扁平な感を受ける。調整は体部上半は回転ナデ、下半から底部にかけては横ナデや不定方向のナデである。

樽形甌(42) 出土数は少なく、1点のみ図化された。体部の膨らみは小さいものと推定される。体部は凸帯によって区切られた紋様帯には波状紋が施され、側面も櫛掻きによる紋様が施される。

器台(43) 出土数は少なく、鉢形器台が1点図化された。口径約31cm、口縁部は短く外反させ、丸く仕上げた端部の下方には凸帯を巡らす。体部は上半が直線的で全体的にも体部の膨らみは小さいものと推定される。2条1単位の凸帯によって区切られた紋様帯には波状紋を施す。

壺(45~51) 壺としたものの中には壺と判別基準の難しいものが存在する。そのためここでは小型壺・中型壺と呼称されるものもふくめ、口径30cm以下のものを壺として扱った。

壺は口頸部に紋様を巡らせるもの(46~51)と無紋のもの(45)があり、圧倒的に前者の出土数が多い。

無紋の45は、丸く仕上げた口縁端部の下方に、断面三角形の凸帯を巡らすシンプルなものである。

頸部に紋様を巡らすものは、口径20~28cmと様々であるが、25cm前後のものが多い。口頸部の形状は体部から朝顔形に大きく外反するものがほとんどで、TG232型式にみられるような直立する頸部から口縁部が大きく外反するものはみられない。口縁部は端部の直下に凸帯状の稜をつくりだし面をなすもの(46・48・49)や端部のやや下方に凸帯状の稜を巡らすもの(47・50)がある。頸部の紋様は波状紋で、紋様帯を凸帯によって区画するものが一般的である。体部の形状は良好な資料が少ないが、51は完形品に復原された。最大径が体部上半にあり、肩部のよく張ったものである。他の壺も類似したものと推定される。体部の調整は、外面には平行タタキを残存させ、内面の当て具痕は頸部付近まで丁寧になで消すものが多いが、内面の当て具をそのまま残存させたもの(51)もある。

大型壺(52) 壺に比べ出土数は少なく1点のみ図化された。口縁部は欠損するが、口径40cm前後と推定される。頸部は凸帯に区切られ、その間に波状紋を巡らす。

壺(44) 口縁部を「く」の字状に大きく外反させるもので、長胴壺と推定される。

深鉢(53) 彫らみの小さい胴体部から、口縁部を短く外反させるものである。外面にはタタキ目を残存させ、内面はナデにより仕上げる。還元焰焼成によって焼き上げるが、胎土には粗い砂粒を含み、軟質系土器の範疇に含まれる可能性が高い。

甌(54) 体部は直線的にやや開きながらのび、口縁部は短く直立させる。調整は外面が回転ナデ、内面は板状工具により横方向のナデで仕上げる。焼成は完全な還元焰までは及ばず、瓦質に仕上がる。器形、焼成の特徴から須恵器とするより軟質系土器の範疇で考える方が妥当である。

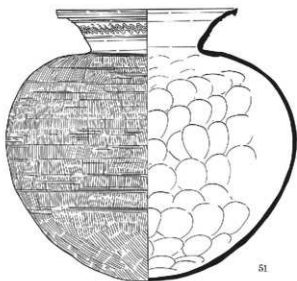
壺(55) 甌の可能性もあるが、胴体部の張りが大きく壺とした。胴体部には沈線が巡り、把手の貼付け痕跡が観察される。焼成は完全な還元焰焼成である。

土師器(第25図、図版15)

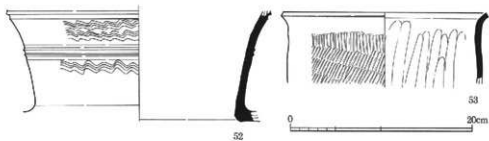
小型の壺と高杯が数点図示された。

53は口径12cmの小型の壺である。口縁部を「く」の字状に短く外反させ、端部は丸く仕上げる。体部の外内面には粗いハケ目が残存する。

高杯は小型と大型の2種がある。57は杯部が碗状を呈する小型高杯である。内面に粗いハケ目がみられる。62・63は平らな底部から口縁部を外方向に長くのびる大型高杯である。



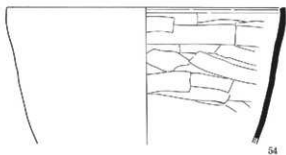
51



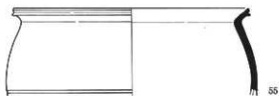
52

53

20cm

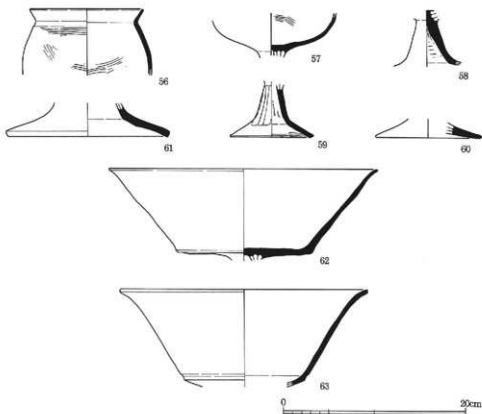


54



55

第24圖 土坑1(1-00)出土遺物4

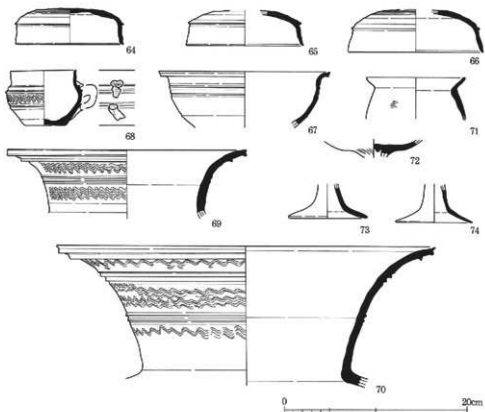


第25図 土坑1(1-00)出土遺物5

62は口縁部は直線的で端部は丸い。63の口縁部はやや外反し端部は面をもって仕上げる。脚部は、いずれもやや開きながらのびる脚柱部から裾部が屈曲して大きく開く形態であるが、その大きさから小型高杯には57・58、大型高杯には61が伴うと推定される。調整は残存状況が悪く不明なものが多いが、59の柱部にはミガキ調整が観察される。60は器壁の厚いもので、伴う杯部については不明である。

以上、出土遺物について詳説したが、その時期について若干触れておく。

杯では天井部が扁平なもの(1)、底部が平底のもの(7・9)などTK208型式より先行する特徴を備えたものが存在する。この傾向は、高杯の透かしが4方向である、高杯の飾りつまみが2箇所に配される、壺の口縁部端部にやや丸みをもつなど、他の器種でも同様に認められる。一方、数は少ないが、前者よりやや後出形態の特徴を備えたものも存在している。これらのことから、当遺物群は、TK216型式期～TK208型式期に比定され、その中心はTK216型式期にあると考えられる。



第26図 土坑2（2-00）出土遺物

土坑2【2-00】（第7・26図，図版15）

調査区の北西端，土坑1の南に位置し，当土坑の東には建物9・10，南には建物11が立地する。

土坑の北側は削平されているが，平面形はやや不整形の隅丸方形を呈すると考えられる。平面規模は削平により全体を把握することはできないが，東西6.2m，南北は6.4m前後と推定される。深さは最も残存状況の良い場所で約0.1mで，土坑1同様削平はされているものの元来浅いものであったと推定される。

埋土は，削平により土坑の上層の状況については把握できなかったが，下層は2層に細分された。上層が暗灰黄色砂礫混じりの粘土で，下層が暗青灰色粘土である。

遺物は土坑1に比べ少ない。しかし，当土坑の上部や周辺の包含層からは数多くの遺物が集中して出土している（第29～32図）。この遺物群は，当土坑に伴っていた偶然性が高く，当土坑も土坑1同様の状況であったと推定される。

出土遺物は第26図に示した。

杯蓋64・65は、天井部がやや扁平で、口径に対して器高は低い。天井部のヘラケズリは広い範囲に施し、64はカキ目で装飾する。66は高杯の蓋と考えられる。口径は14cmを越え、やや大型の有蓋高杯に伴うと推定される。

67は、丸みをもつ杯体部から口縁部を短く外反させる鉢形の大型高杯と推定される。口縁端部の形態は、器台や壺と類似する。

68の把手付碗は、口径7cm、器高6cmの小型品である。底部は平底、体部は丸みもち口縁部は直立する。底部付近の調整は未調整で、把手部は装飾部のみ残存する。土坑1の出土品より後出する特徴を備えた製品である。

69は壺、67は大型甕の口頸部で、いずれも頸部は波状紋で装飾される。

71～74は土師器である。71は小型甕、72～74は杯部が碗状を呈する小型高杯である。

遺物の時期は、土坑1とはほぼ同様の特徴が観察され、同時期と考えられる。

第3項 包含層の遺物（第27～35、図版15～19）

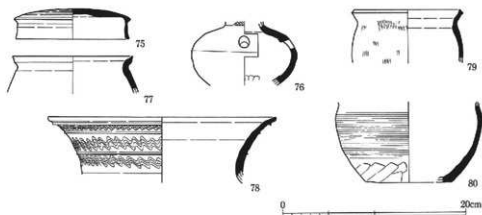
当調査では包含層から数多くの遺物が出土したが、特に古墳時代中期遺構面を覆う黒褐色砂混じり粘質土での出土が顕著である。

さらに、その出土位置を検討すると土坑1・2の上面やその周辺に集中する傾向が看取され、削平により若干の移動は考えられるが、多くはその下部に存在する土坑に伴う可能性が高いとされる。また、調査時に遺構内遺物と認識できず、包含層遺物として取り上げたものも存在する。そのため、ここでは包含層の遺物の出土位置を重視し、各遺構の上面や周辺域毎に分けて図示した。

建物5・6上面（第27図、図版15）

調査区の西端、建物5・6の上面からの出土である。出土位置からは土坑1・2に伴うとは考え難い。なお、便宜上建物5・6上面としたが、当遺物が直接建物5・6に伴うものではない。

75～78は須恵器である。杯蓋（75）、壺（78）の諸特徴は土坑1のものと同様である。79・80は軟質系土器の平底鉢と考えられる。体部は影らみのあるもので、口縁部の外反は比較的緩やかである。体部には平行タタキがわずかに残存する。80は完全な還元焼成によるものであるが、器形からは軟質系土器の平底鉢の範疇に含まれる。



第27図 包含層出土遺物1（建物5・6上面）

建物1・2上面（第28図-84~93、図版16）

調査区北西端、建物1・2の上面の出土である。出土位置から土坑1・2に伴うとも考えられるが、その可能性は低いと推定される。

84~91は須恵器である。蓋84は口径11cmと他に比べやや小型である。86は高杯の蓋である。天井部の膨らみが少ない、口縁部は短い、天井部を沈線と刺突紋で飾るなど、陶質土器の系譜を色濃く反映した製品である。杯身（87~89）はいずれも底部が扁平で、立ち上がりが高い。口縁端部は面をもつもの（87・88）と丸く仕上げるもの（89）が混在する。90は鉢形高杯の杯部のみを焼成したもので、底部には仕上げ調整が施されていない。91はすり鉢の底部片である。

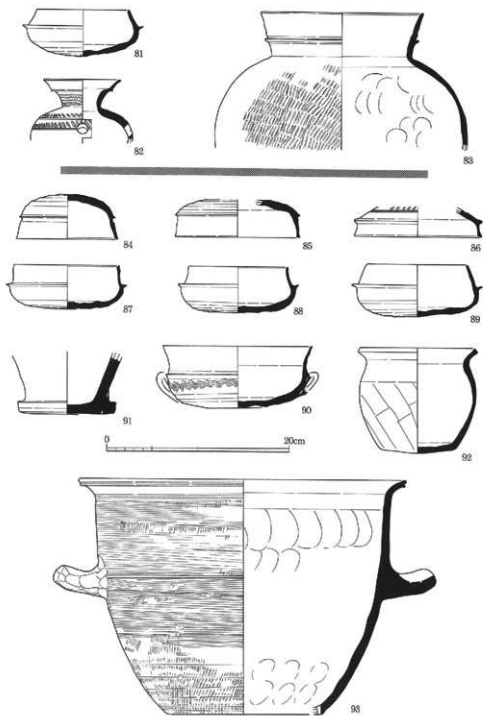
92は軟質系土器の平底鉢である。体部の最大径は体部中央付近にあり、全体に膨らみのある感を受ける。口縁部は体部から短く外反させ、端部は面をもって仕上げる。体部の外面には上半部まで及ぶ静止ヘラケズリが観察される。93は甌で土坑1の出土品に比べ、体部に膨らみがあり、口縁部も短く外反させる特徴を有する。外面調整はタタキで器面を整え、カキ目や回転ヘラケズリで仕上げる。内面はアテ具痕を丁寧にナゲ消す。

これらの時期は土坑1と同時期と考えられる。

土坑1上面（第28-81~83、図版15）

出土位置から土坑1に伴う可能性の高いものである。

82の甌は、体部にも2段の刺突紋を巡らす装飾性の高い製品である。83の直口壺は、頸部と口縁部の境界に凸帯を巡らすシンプルな形態のものである。内面には無紋のアテ具痕がわずかに残存する。



第28图 包含层出土遗物2 (土坑1, 建物1・2上面)

土坑 2 上面、周辺部（第29～32図、図版16～19）

第29・30図に示した遺物は土坑 2 の上部からの出土品、第31・32図に示した遺物は土坑 2 の周辺部からの出土品である。両者とも出土位置から土坑 2 に伴うものと推定されるが、特に前者はその可能性が特に高いものである。以下土坑上面と周辺部に分けて遺物を観視する。

上面の出土遺物

須恵器（94～119）、軟質系土器（120・121）、土師器（122・123）があるが、そのほとんどは須恵器である。

杯蓋は天井部がやや扁平なもの（94）と、天井部に丸みをもつ（95）を図示した。口縁端部はいずれも面をもって仕上げる。

杯身は 2 点（96・97）を図示したが、このうち97は底体部の深さに比べ立ち上がり部の短いものである。端部はいずれも丸く仕上げる。

98・99は碗である。98は口径 8 cm、器高 4.2 cm の小型品で、器形は把手付碗の碗部と酷似する。把手付碗の製作途上で焼成した製品の可能性もある。99は丸底の底部から体部がそのまま丸みをもつてのびるもので、類例の少ない器形である。全体の仕上げは回転ナデによって行なうが、底部は静止ヘラケズリである。

把手付碗は平底（100・102）と丸底（101）のものが図示された。100は口径と器高のバランスがとれた製品で、把手の上部には渦巻き状の装飾が付加される。101は全体に器壁を薄く仕上げた製品である。102は口径に比べ器高の低いもので、器壁は厚い。

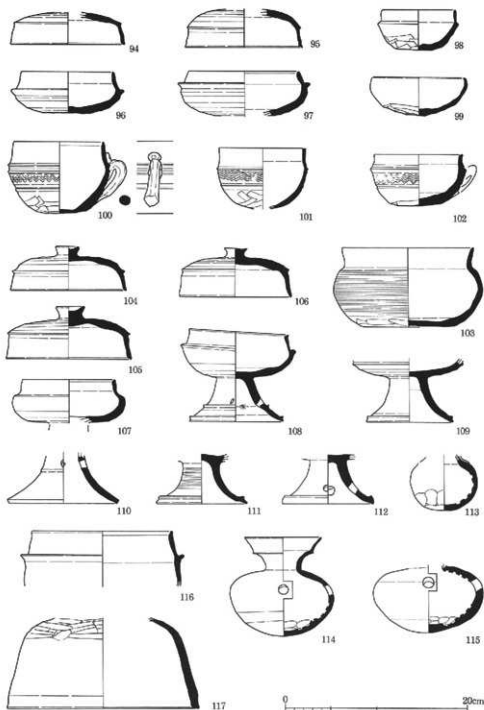
104～106は天井部につまみが付く高杯の蓋である。104は他に比べ口縁部が短く器高も低い。口縁端部は104・106が丸みをもち、105は面をもつ。つまみは106が中央部が若干盛り上がり、104・105は中央部がくぼむ。

高杯は 6 点図示した。有蓋高杯107は碗状杯部から口縁部を直立させるもので、類例の少ないものである。有蓋高杯としたが、無蓋高杯の可能性もある。109は無蓋高杯である。110～112は高杯の脚部片で、110には菱形透かしが 4 方に穿たれる。

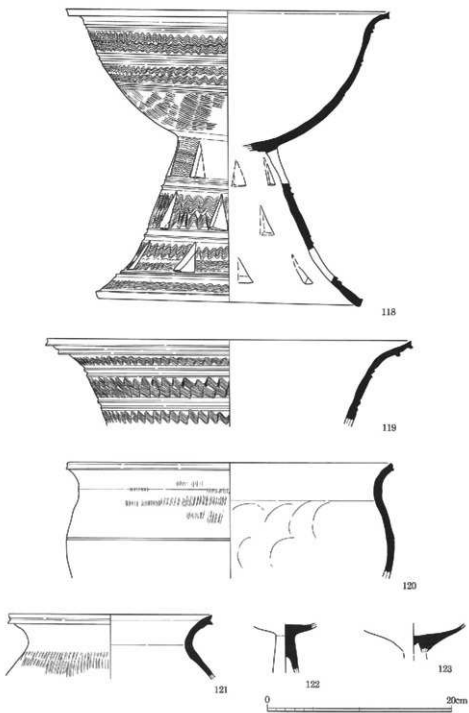
113は小型壺と推定される。底部付近は指オサエの後ナデで仕上げるが、オサエの痕跡が明確に残存する。

臚114・115は、いずれも体部の最大径が体部中央よりやや上部に位置し、肩部が若干張った感を受ける製品である。

116は口縁部から体部にかけての破片であるが、その特徴から有蓋脚付鉢と推定される。



第29图 包含层出土遗物3 (土坑2上面)



第30圖 包含層出土遺物4（土坑2上面）

117は大型の蓋で直口壺などに伴うと推定される。

鉢形器台118は完形品に復元された。鉢部の下半部に膨らみがある、口縁部を大きく外反させる、脚部は直線的に開いてのびる柱部から裾部が若干屈曲して大きく開くなど、初期須恵器でも古い型式の諸特徴を備えた製品である。

大型甕119は頸部を波状紋で飾るもので、紋様帯は凸帯によって3段に区画される。

軟質系土器は鉢(120)と長胴甕(121)が図示された。なお120は鉢としたが、把手の付く場の可能性もある。

土師器は高杯(122・123)が図示された。いずれも小型の高杯で脚部が柱部から大きく開く形態である。

周辺部からの出土遺物

上面同様、そのほとんどが須恵器(124~145)で、他には軟質系土器の長胴甕(146)が図示された。

杯蓋124は全体に器壁が厚く、重厚な感を受ける製品である。

杯身は3点(125~127)図示したが、いずれも全体に器壁が厚く、立ち上がり部は内傾しその高さも低い。底体部は125・127は丸みもち、125は偏平である。

把手付碗は3点図示した。128は小型品で、口径に比べ器高の高いものである。129はバランスのとれた製品で土坑2上面出土の100と類似する。130は口径に比べ器高の低いもので、口縁部も波状紋により飾られる。なお把手の有無は不明であり、碗の可能性もある。

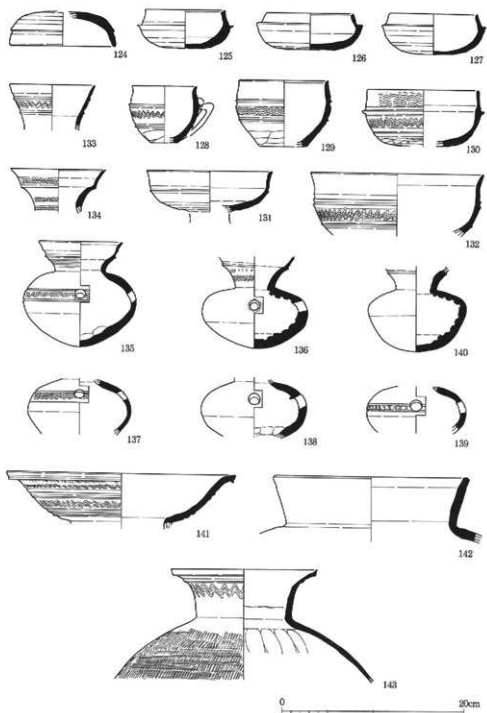
高杯は無蓋高杯の杯部のみが図示された。131は杯蓋を利用したもの、132は鉢形のものである。132には残存していないが、体部には飾りつまみが貼付けられていた可能性が高い。

甕は6点(134~139)図示した。底体部の最大径が体部中央よりやや上部に位置するもの(135・136)と最大径が底体部のはば中央部にあるもの(137~139)が混在する。口頸部については残存品が少ない(134~136)が、135は他に比べ頸部の短い特徴を有する。

140は小型壺である。口縁部は頸部から段をつかって外方向にのびるものと推定される。体部は最大径が上方に位置し、前述の甕135・136よりもより肩部が張る。

141は筒形器台の受部である。全体器形は不明であるが、谷部出土の223と類似するものと推定される。

142は短頸の直口壺で、大型の蓋に伴うと推定される。壺143は口頸部に比べ底体部の大きいものである。体部外面はタタキの後、部分的にカキ目を施し、内面は当て具痕をナデにより丁寧にすり消す。



第31图 包舍层出土遗物5 (土坑2周边)